北九州 歴史文化遺産

地域の誇り、歴史文化遺産。毎号1つのスポットを見つめ、歴史秘話と共にご紹介します。

第十二回 小倉のキリシタン殉教

小倉北区日明はかつて海沿いの丘陵だった。その地に小舟で着き、丘の上まで自ら欲して裸足で登り、刑吏に首を討たれ54年の生涯を閉じたキリシタン武将がいた。江戸時代初期の小倉藩主・細川家重臣の加賀山隼人、洗礼名ディエゴ。彼をはじめ北九州の各地で殉教の悲劇が生じていた。

小倉のキリシタン二〇〇〇余人

加賀山隼人は摂津・高槻（大阪府）の生まれ。キリシタン武将として有名な高山右近に師事してルイス・フロイス神父から受洗。右近が豊臣秀吉の禁教令で改易後、丹後の細川忠興に仕え、一六〇二年、忠興の小倉入府に従って小倉入りした。関ケ原合戦で戦功を挙げ、信頼されていた加賀山は高禄と下毛郡（大分県）奉行職を与えられ、布教にも尽くした。忠興自身も、妻ガラシャが関ケ原合戦の直前、徳川方にあった彼の立場を思って殉教していたことやその葬儀をキリシタン宣教師が荘厳に催していたことなどから教徒を保護。レオン・パジェス著「日本切支丹宗門史」によると、一六一〇年当時、小倉城下で人口6,7000人のうち実に2000人余りが洗礼を受けていたという。

カトリック小倉教会前に立つ加賀山隼人殉教顕彰碑

だがガラシャを導き、自らも尊敬していたセスペデス神父が一六一一年、小倉で病没したのを境に、忠興は教会の破壊、宣教師の領外追放を命じるなど態度を一変させた。キリシタン排斥の徳川幕府の意図を察知、外様大名の生き残る策として幕府に順応する道を取ったとみられる。一六一三年、幕府はキリシタン禁教令を発布。忠興は家臣、領民に改宗を強く迫った。加賀山も迫られたが、大名の座を投げ打っても信念を貫いた師・右近の生き様を見、民衆を領導してきた彼は信仰を捨てず、遂に一六一九年十月、命を絶たれた。

殉教は日明の丘

上記の宗門史や「日本西教史」などによると小倉城下から1マイル下った所まで小舟で行き、衛士に「今日の如き喜事はない」と語り、またセスペデス神父から拝領した修道服を同行の信徒に与えて刑に服したという。史書には地名はないがキリシタン研究家で信徒の酒井修さん（74）や、郷土史家の故木島甚久氏は距離や下るという表記は西を意味することなどから日明を特定している。

加賀山隼人が殉教のため小舟で来たとみられる海を望む、日明の丘からの景観

小倉での殉教は一六一五年三月のカタノジャ七兵衛から始まり、記録に残るだけでも小笠原藩時代の一六三三年まで続き、無数の人命が失われた。加賀山の一族17人も細川家の移封先の熊本などで殉教した。酒井さんは「どの人も弱者に目を向け、救済し分かち合う心を貫いていた。その精神は一つの宗教だけのものではなく、現代のあらゆる人にも通じることです」と話している。

シニアスタッフ　村田和夫